

# 資料涉猟余話

その61

樋口龍峽は、1911年、大隈重信主宰の雑誌『新日本』が創刊されると、永井柳太郎と共に編集にあたり、政界への興味を強め、さらに1914年に井上哲次郎の推薦により文学博士の候補者となったが、折からの井上らと上田萬年らの反目によって、結局上田らの推す澤柳政太郎が当選したことから政界進

る。その墓碑は、北原痴山の選書にある。龍峽の墓碑を書いた北原痴山(阿智之助)は元治元年水戸浪士伊那路通行の折、飯田の

那路通行の折、無策の飯田藩を尻目に、豊三郎の提言で、稲雄が総指揮をとり、松之助は養継嗣となった飯田町の名望家樋口与平として軍資金調達に骨折った。三兄弟の尽力で浪士の飯田領無血通過を成功させた。豊三郎の記録した「甲子紀行」は三兄弟の絆を物語る史料だ。その後も、三兄弟は私費を投じての平田篤胤の遺稿「弘仁暦運記考」や「古史傳」出版事業は云々までもなく、幕末から明治期にかけての彼らの



松本中学時代(小林家蔵)中段向かって左龍峽、中央が恩師島地五六、右は小林洋吉

## 黄眠先生が行く 11 叔父龍峽樋口秀雄(下)

嶋 不濁

町を戦火から守った国学者三兄弟を生んだ知恵者座光寺村掛野の北原家から上郷の北原家に入った人である。国学三兄弟とは、座光寺村

に出奔、二男稲雄が20歳で家督を相続、4歳下の豊三郎(眞幸)、松之助(光信)とは11歳の差があった。元治元年水戸浪士伊

活動の場は全国にまたがった。さらに「深山自由新聞」の後を受けた新家へ入った光信(興平)も町役人・戸長・宮司・県議会議員等を歴任している。この光信が日夏の祖



＊好評発売中！  
嶋不濁著『黄眠先生が行く 日夏耿之介残影』(南信州新聞社刊)

父、また「伊那公報」発行の鼎の素封家・中島徳三郎の末娘が日夏夫人添である。ことほど、さように、学問や文化は一代では生まれにくいことを痛感するのである。